

## 2024年6月16日年間第11主日集会祭儀 円山カトリック教会

### マルコによる福音4章26-34節

その時、イエスは人々に言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」

更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、32 蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

イエスは、人々の聞く力に応じて、このように多くのたとえで御言葉を語られた。たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。

おはようございます。3分間の聖書の分かち合いの奉仕をさせていただく札幌聖心のチャプレン田口でございます。

今日の福音で、時の流れの中で語られる種の成長は、とても力がこもってダイナミックだと感じます。以前、千年も前の遺跡から蓮の種が見つかり、それを植えたところ、見事に花が咲いたと聞いたことがあります。種にこもる力は、時を超えることに気づきます。

しかし、その種の力は、「一粒の麦が地に落ちて死ななければ実を結ばない」(ヨハネ12章24節)という言葉の一粒の麦と同じように土に蒔かれて、闇の中である意味死を体験した時に、初めて発揮されるのではないのでしょうか。暗い土の中で冬を越す種は、春が来るといつの間にか殻が破れ、その中身が成長し、やがて根を張り、芽が伸びて、太陽の光の中に躍り出ます。ずっと昔の種であっても、土に蒔かれるとその力が発揮されることが何とも不思議です。時を超えるその力は、神様の力によって、そして私たちの計画でなく、神様の計画によって実ることを想う時、思い出すことがあります。

幼児洗礼の私は、8歳の時に初聖体を受けたのですが、その準備として、指導のシスターから渡された祈りの本は口語体で(多分英語の本の日本語訳と思いますが)、「イエズス様、あなたをお愛し致します。」という言葉がありました。バチカン公会議の前でしたから、耳から入る文語体の祈り(「主は限りなく愛すべき御者(おんもの)にましますが故に、われ、心を尽し、力を尽して、深く主を愛し奉る。」等)やラテン語、*Ágnus Déi, qui tollis peccáta mún-di: miserére nóbis, dona nobis pacem.*などは、日常のことばでないので、かえってすらすら唱えられたのですが、この口語体の祈りは言っていることが理解できるために、逆に「愛するってどういうこと?」とさっぱり実感がわからず、幼い私はひそかに困り果てました。それから10年間、「この祈りを、実感を持って言えますように」と願って、唱えていました。17歳の時、祈りの体験の中で、ついにこの言葉を実感をもって言える時がきました。今考えると、この言葉は私にとっての種でした。種にこもる力は神様の力でした。この私の日常に神の力が働いたことへの感謝は尽きません。

二千年前のイエスの福音という種は、神様の力をそのうちに込めて、現在の私たちの日常生活の中に芽吹き、開花し、大きく実ります。そして私たちがせせこましく閉じこもろうとする殻を破り、大きく拡げてくれるのです。異質な存在を受け入れ、理解し、共感して対話し、上下も年齢も国籍も職業も何も関係ない、神の力がこもった共同体に実っていきます。

神の国の種となるイエスの言葉を味わい、大きく広く私たちの心を拡げる神の力を受けて実りの時を迎えられますように、そのためには闇の中で過ごす忍耐の時も偲ぶことができますようにお互いに祈り合いましょう。ありがとうございました。

Hãy ném trái những lời của Chúa Giê-xu, là những hạt giống của vương quốc Đức Chúa Trời, và nhận được quyền năng của Đức Chúa Trời để mở rộng tâm hồn chúng ta rộng lớn. Chúng ta hãy cầu nguyện cho nhau để có được một thời gian sinh hoa trái. Cảm ơn bạn